［別紙２］

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名　趙　紅

中国においては癌の罹患率が年々上昇し、死因の上位を占めるに到っている。癌患者自身のQuality of Life (QOL)評価が重要視されるようになった。本研究は、European Organization for Research and Treatment of Cancerによる開発された癌特異QOL調査票である Quality of Life Questionnaire Core 30 (EORTC QLQ-C30) version 3.0の標準中国語版の計量心理学的検証を行い、EORTC QLQ-C30と不安尺度であるState-Trait Anxiety Inventory (STAI)を用いて癌患者のQOLに対する患者教育介入の効果を評価した。主な結果は下記の通りである。

1. EORTC QLQ-C30の計量心理学的検証について、143名の癌患者（乳癌47名、婦人科癌47名、肺癌49名）を対象として内的整合性、妥当性（収束妥当性、弁別妥当性、基準関連妥当性及び構成概念妥当性）及び感度を検討した。その結果、EORTC QLQ-C30標準中国語版は、内的整合性、基準関連妥当性及び構成概念妥当性に概ね問題がないと判断された。収束妥当性と弁別妥当性についてはさらなる検討が必要であることが示唆された。
2. EORTC QLQ-C30 の再現性について、化学療法後、病状が安定している乳癌患者 36 名を対象に、２週間の間隔をおいた再テスト法を用いて検討した。各尺度のピアソン相関係数はすべて 0.80 以上と高く、再現性が保たれていた。
3. 乳癌、婦人科癌及び肺癌の３群に分けて、癌種別の信頼性と妥当性を解析したところ、３群全体での解析とほぼ同様の結果が得られた。しかし、信頼性と妥当性に関しては一部再検討が必要である。
4. 患者教育介入効果の検討は、入院中の婦人科癌患者（実験群 28 名と対照群 24

名）を研究対象者として募集した。実験群には通常の看護ケアと患者教育介入、対照群には通常の看護ケアのみを実施した。患者教育介入を固定効果、施設を変量効果、ベースラインのスコアを共変量として反復測定分散分析を行った結果、QLQ-C30では痛み、不眠、及び食欲不振の尺度/項目に患者教育介入効果が認められた。介入の有無と時点の交互作用が認められたのは役割機能尺度のみであった。また、時点別には、実験群と対照群の間に、役割機能、痛み、不眠、及び食欲不振尺度/項目で有意差が認められた。一方、不安状態については、介入効果、時点効果及び介入と時点の交互作用はいずれも認められなかった。今後、患者の状態の変化に合わせた適切な教育プログラムと教育方法の開発が必要と考えられる。

以上、中国において癌特異尺度であるEORTC QLQ-C30 (Version 3.0)標準中国語版の計量心理学的検証を行い、また、癌患者のQOLに対する患者教育介入の効果を評価した。本研究は、QOLに関する研究が数少ない中国において、広範囲の癌患者のQOLを評価するための有効な調査票であることが明らかとなったことは、この分野の研究に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと判断される。